

P-420 過期産予測のための癌胎児性  
フィブロネクチンとサイトカイン測定の意義

国立相模原病院、北里大学\*

今井雅夫、谷 昭博\*、斉藤真希\*、菅 博胤、  
安達敬一、林 玲子、巽 英樹、斉藤 克\*、  
庄田 隆\*、天野 完\*、西島正博\*

〔目的〕過期妊娠、過期産を事前に予知し、その発生を防ぐ目的で我々はビショップスコア以外の定量的方法として腔内の癌胎児性フィブロネクチンを妊娠37週から分娩まで毎週測定し、陣痛発来時期予測の指標としての有用性を検討した。またこれと並行して頸管粘液中のサイトカインを測定し37週以降における腔内フィブロネクチンの出現機序と頸管熟化との関連について考察した。〔方法〕当院自然分娩例で単胎、先進部頭位症例143例に対し妊娠37週以後毎週外来受診時に腔分泌液を採取し癌胎児性フィブロネクチン定量と頸管粘液中のサイトカイン(IL-1 $\beta$ , IL-6, IL-8, TNF $\alpha$ )をELISA法で測定し、妊娠37週以降分娩までのフィブロネクチン値とサイトカインの推移を検討した。

〔成績〕陣痛発来前1週間未満の癌胎児性フィブロネクチン値は $183.0 \pm 24.2$  ng/mlでありそれ以前の $77.4 \pm 36.7$  ng/mlに比して有意に上昇し( $p < 0.05$ )検体採取日から分娩までの日数とフィブロネクチン値に相関が認められた(相関係数0.33)。一方IL-8は陣発前1週間未満よりもそれ以前に有意に高値を示した( $1246.1 \pm 148.7$  vs  $1738.2 \pm 151.6$  pg/ml,  $p < 0.05$ )。IL-1 $\beta$ , IL-6, TNF $\alpha$ に変動はなかった。〔結論〕腔内のフィブロネクチン測定が分娩時期の予測に有用であることが示唆された。その発現機序はIL-8の上昇がフィブロネクチン上昇に先行していることからまず頸管熟化が起こりそれに続く前駆陣痛等子宮収縮頻度の増加に伴う物理的的刺激により本来卵膜の接着分子であるフィブロネクチンが腔内に出現すると考えられる。よって予定日超過例においてフィブロネクチンが低値の場合、DHA-S、ラミナリア桿等により頸管熟化を促したうえで分娩誘発が有効と考えられる。

P-421 産褥期におけるEIV (External Iliac Vein)血流速度の推移に関する検討

富山医薬大

酒井正利、佐々木 泰、種部恭子、斎藤 滋

〔目的〕近年、血栓塞栓症は妊産婦死亡原因の第1位になっており、その病態を解明することは極めて重要である。我々は、超音波カラードップラー法を用いてEIV血流速度が妊娠中期から後期にかけて著しく低下していることを報告してきたが、今回は産褥期の血流動態を、血栓症の頻度が高い帝王切開例と正常分娩例で比較検討した。

〔方法〕対象1. longitudinal study; 妊娠, 分娩経過ともに正常であった褥婦12例, 帝王切開後の褥婦12例, 計24例. 対象2. cross sectional study; 経膈分娩群52例, 帝王切開群36例. 対象それぞれに分娩前, 分娩後30分, 1時間, 2時間, 6時間, 24時間, 2日, 3日, 5日の, 仰臥位でのEIV血流速度を測定した. 測定には超音波ハルスドップラー法 (Aloka SSD-1200, 3.5MHz) を用い, すべて患者の同意を得たうえで行なわれた。

〔成績〕1. longitudinal studyにてEIV血流速度は経膈分娩群, 帝王切開群ともに分娩前から分娩直後にかけて急上昇したが, 両群に有意差は認めなかった. 2. 産褥6時間, 24時間での帝王切開群のEIV血流速度はそれぞれ $19.41 \pm 4.39$  cm/sec,  $16.15 \pm 3.50$  cm/secであり, 経膈分娩例 $24.01 \pm 3.03$  cm/sec,  $19.63 \pm 3.76$  cm/secに比し有意に ( $p < 0.05$ ) 低下した. 3. EIV血流速度は産褥2日から5日の間で変化はなく, 両群間の有意差も認めなかった. 4. cross sectional studyにおいても産褥6時間, 24時間において帝王切開群のEIV血流速度は経膈分娩群よりも有意に ( $p < 0.01$ ) 低下していた。

〔結論〕帝王切開術後6時間から24時間でEIV血流速度は低下することを初めて指摘した. この時期に静脈血流のうっ滞を改善することにより血栓症の発症を予防しえる可能性が示唆された。